

古典単元の設定の視点

水 田 潤

1

古典教育を規定する要因の第一に、単元設定の問題がとりあげられる。これは、本文の決定に重要なかわりを持つばかりではなく、単元設定を誤った古典教育は、その時点において挫折し、学習者から古典をひき離してしまう。古典教育の場合でも、単元設定の立場は、その教育課程を計画的・能率的に展開するための学習経験・教材内容の一つの統一体として、古典教育の目標をどううけとめ、うけつぐかによつて決定される。したがつて、単元設定にさきだつて、古典教育の目標の決定が先行する。古典教育で何をめざすかが、単元設定にあたつての当面の問題となる。厳密にいうなら、古典教育では、それが規範論に立つか、現代的意義論に立つか、また、古典認識論の立場に立つかによつて、古典の価値の認定もしくは評価に、かなりの異同が認められなければならない。ときには、単元そのものが、古典の価値の総称ともなりうる。

単元とは、学習経験の一まとまりであり、教育課程の一つの単位として成立する。したがつて、学習の単位としての単元は、その一つ一つが有機的にはつきりとした目的を持つたつながりを持つて存

在していなければならない。また、単元は、それが教育であるかぎり、学習者の成長発達過程の中でとらえられ、位置づけられなければならない。古典単元について見ても、一つの古典単元は、古典単元全体の中で単位として成立するより前に、国語全体の教育課程の中で位置づけられなければならないし、学習者の必要・関心の上に定着したものでなければならない。

単元は、その統一の中心を、学習者の生活活動や、生活体験におくか、教材内容の持つ体系におくかによつて、経験単元と教材単元に大別して考えられるが、古典教育の場合でも、これは例外ではない。経験単元とは、学習者が、その生活場面のそれぞれの現実で当面する生活の諸問題を中心として統一せられる単元であり、学習者の興味・必要・能力が基調となる。戦後の国語教育が、より経験単元的な色彩をこくし、国語科の全領域が、生活的なおいにみちたことは周知のとおりであるが、もとより、国語科の教育課程のすべてを経験単元として設定することは困難であるし、とくに古典の場合には、いくつかの障害が予想される。しかし、経験単元、教材単元のいずれの視点に立つとしても、単元の決定には、その基本的な

条件として、学習者の興味・必要・能力の三つが考えられなければならない。古典教育では、とくにこのことが重要である。現代文学の場合は、単元や導入のいかんにかかわらず、本文そのものの興味によつて、抵抗なくその学習目的を達することのできる場合が少なくないが、古典の場合は事情が異なる。単元設定のしかたや、導入によつて、学習者の興味を刺激し、本文への関心と問題解決の意欲を持たせることが必要になる。このことのない古典のたんなる読解作業は、どんなに精密に行なわれようとも、大きな学習効果は期待できない。

2

すでに旧版に属するが、昭和二十六版「中学校 国語科 学習指導要領 国語科 新」では、国語科での問題解決について次のように説明している。

聞くこと、話すこと、読むこと、書くことは、どれも何かについで聞いたら、話したり、読んだり書いたりするのであつて、そこに何かの解決すべき問題や興味を持つている話題がなければならぬ。(P.74)

古典の学習の場合でも、このことは例外であつてよいわけはない。また、「読むこと」について示された具体目標の中には、

古典については、特に生徒の実態に即して選んだり与えたりする。(P.58)

とあるが、実態に即するとは、たんに学習者の能力によつて、古典本文の難易を考慮するだけではなく、その興味・関心・問題解決の面からも、その適否が判断されなければならない。

ここらみに、前掲の中学校国語教科書の資料によつて、中学校で

の初出期(主として一年・二年)の古典単元を分類して示すと、次のようになる。

(一) 現代語訳による場合

A 伝説民話型 ③(教図・学図・二葉・秀英・教出・大修・書院・筑摩)

B 作品形態型 ②(東書・中教)

C 古典入門型 ②(謂隆・三省)

D 言語・言語史型 ①(日書)

E 思索型 ①(実教)

十五社のうち十四社までが、古典の初出単元では、現代語訳または劇化のかたちで、古典を教材本文としている。

A 伝説民話型では、そのほとんどが、「むかし話」もしくは「民話」として単元を設定し、教材本文では、古事記(倭建命・やまたのおろち・いなばの白うさぎ)、今昔物語(強力僧正・信濃守藤原陳忠)、わらべ唄歳時記(でんでん太鼓)、その他「日本の昔話」(関敬吾)より取材のものをを用いている。なお、単元配列の上では厳密には初出ではないが、同じくこの時期のものとしては、宇治拾遺物語(鬼にこぶとらること・すずめ恩を報ずること)、竹取物語(かくや姫)などが、伝説民話型によつて提出されている。B 作品形態型では、「劇」「小説」として単元を設定し、雨月物語の「夢応の鯉魚」が「劇」で、蘭学事始が「小説」で採られている。C 古典入門型単元は、現代語訳初出の場合には、「古典に親しむ」「古文に親しむ」の二例にすぎないが、原文初出

の場合には圧倒的に多い単元形式である。ただし、この現代語訳初出の二例では、さすがに竹取物語など、説話的要素の多いものが採られている。D 言語・言語史型は、一社にすぎないが、「かなとかな文学」として、解説をともないながら、更級日記、源氏物語、枕草子などが、言語と文学との接点においてとらえられ、解説文中に挿入（現代語訳）されている。E 思索型は、これも一社にすぎないが、「探求の心」として、蘭学事始を用いている。この型は、古典単元としてはかならずしも多くはないが、説明文教材、その他文学単元には相当数とられている単元である。

(二) 原文（現代語訳対照もふくめて）による場合

A 伝説民話型 ②（二葉・秀英）

B 作品形態型

C 古典入門型 ⑤（日書・中教・教図・開隆・三省）

D 言語・言語史型 ③（東書・教出・光村）

E 思索型

F ユーモア型 ②（学図・大修）

初出期に、十五社のうち十二社までが、原文（現代語訳対照もふくめて）によつて古典単元を構成している。

A 伝説民話型では、宇治拾遺物語、古今著聞集、徒然草、十訓抄などの中から説話的要素の多い章がとられ、C 古典入門型でも、伊曽保物語、宇治拾遺物語、古今著聞集、今昔物語、花月草紙、狂言記など、Aと同様に説話的要素の多いものや、こつけない要素を持つものが多い。この傾向は、D 言語・言語史型でも変わりはなく、宇治拾遺物語、雲萍雜誌、戒語抄、続鳩翁道話、徒然

草などの中の説話的要素の多いものが採られている。F ユーモア型では、「ユーモアを味わう」「笑いの文学」などとして、狂言記、東海道中膝栗毛、醒睡笑など、いずれもこつけない諧謔文学が採用されている。単元や単元設定の視点の異同を超えて、そのほとんどが説話的要素の濃いもの、もしくは、こつけない要素を持つものによつて構成されている点に注意したい。

3

入門期の古典学習では、学習者の興味と関心を、どのように定着させ、資料との接点をどこに求めるかが問題となる。このことについて、昭和二十九年版の「中学校 高等学校 学習指導法 国語科編」では、次のように解説している。

中学生の古典に対する知識や理解は、主として新聞や雑誌、ラジオや映画などから断片的に得たり、古典に取材した神話や伝説、物語や小説、あるいは古典の現代語訳などから得ることが多い。そこで、古典の学習はまずこの方面から、興味や関心と呼び起し、学習意欲を高めることが効果的である。

興味・関心がこうした視点から位置づけられている。ここから「古典に取材した神話・伝説・物語・小説などについて調べたり、話したりする。」「現代語訳によつて読んだことのある古典、新聞やラジオなどで知つた古典について発表し合う。」という具体的方法が導き出されている。中学校国語教科書の初出期の古典本文のかたよりは、このことの具体的なあらわれでもある。入門期の古典学習が、生徒の興味ある作品から始めなければならないことはいまでもない。しかし、生徒の興味や関心は、こうした視点からだけ

見られなければならないのであろうか。

もとより、成人でさえ親しみにくい古典、言語抵抗の多い古典を入門期に提出することは慎しまなければならないが、「いなばの白うさぎ」や「おろちたいじ」「海幸山幸」「浦島太郎」「かぐやひめ」「はちかつぎひめ」「こぶとり」「一寸法師」「鼻」など（いずれも前記「高等学校 学習指導法 国語科」に例示）の童話古典にたよることだけが、初出期の古典への興味づけであると見る見方は、一つの偏見である。児童期をすでになかばぬけ出した中学生たちの興味や関心は、もつと別のところにもある。導入期という一つの限定を考えたとしても、たんにおとぎばなし、一口ばなしの契機だけにたよろうとする仕方は、「古典への通路」という目標の正当性を認定する立場においても、かならずしも妥当ではない。これは、古典と言えはすぐに源氏物語、枕草子、徒然草の原文という考え方はまた別の意味で誤りである。

文学を享受する経験は決して単一ではない。導入期の古典教育の場合でも、古典に対する興味や関心は、学習者の現実に立ち、かれらの経験に即して、その学習期（中学一・二年）に、価値ある言語経験、文学経験を与えることでなければならない。学習者の情緒や感覚からかけ離れた時点であらえられた単元や資料は、それ自体入門期のものであり、いかに親しみやすく読みやすくても、本当の意味での「古典への通路」とはなり得ない。

古典の単元設定にあたっては、まずこの期の学習者の言語経験・文学経験の実態や志向に目をむける必要がある。古典教育が文学教

育であるからという理由で、文学経験だけにかぎって考えることはまちがいである。文学もまた言語である。とくに学習者の生活に単元設定の視点を求める立場に立つとする場合、その言語経験を見おとすことは許されない。ここでは、生活単元、教材単元の区別にこだわる必要はない。いずれの単元の立場に立つとしても、言語経験・文学経験がともに学習者の生活経験を底辺として成立する。昭和三十三年版「中学校学習指導要領」では、古典教育については「基本的なものに適宜ふれさせ、古典に対する関心をもたせるように留意する。」と述べ、昭和三十四年版「中学校国語指導書」では、この項について「他の読み物との調和を考えた上で適当な時間をとつて、基本的なものに触れさせて、古典に対する関心をもたせるようにする。」と解説しているが、ここに「適宜」とし、「他の読み物との調和」として指示される意味も、たんに文学経験だけにかぎった考え方ではないと思われる。

経験とは、問題を解決しようとする行動であり、主体と環境・資料との相互の活動的な連関の体制である。聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの領域において、相互に連関しあい、そのことによつてなにごとかを主体的に形づくつていこうとする問題解決の手段でもある。したがつて、古典単元の設定においても、たんに読むことにかぎつて単元設定の視点を考える必要はない。また、文学を、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことは別の次元であると考えることもまちがっている。古典教育について見ても、失敗の多くは、古典を特殊の文学として限定して考えることによる場合が少なくない。これまでわれわれは、古典を形式的に異質のものとして考

えずぎてきた。この古典認識の発想が、うらをかえせば「古典への通路」としての童話古典への依存となつて、中学初出期にあらわれたものと見る事ができる。

しかし、中学一・二期は、いうまでもなくもはや童話期ではない。伝説・民話をはじめ、説話系列の古典が、学習資料として不適当だといふのではないが、入門期の単元設定の視点や、資料の選定を、この角度に限定して考えることには問題がある。もとより、古典単元や古典本文が、かつてのように、作品中心の固定したものであつてよい訳はないが、「いなばの白うさぎ」や「おろちたいじ」以下の童話古典だけに、古典への興味・関心の足がかりを得ようとする思考もまたまちがつている。こうした安易さ、こそくさからは、真の古典への関心も、その民族精神のくみとりも期待できないにちがいない。学習者はこうした導入には、なかば失望し、その感覚的なずれに不信をいだいている。生徒の言語経験・文学経験をもつと広く、もつと現実在即して見究め、そこに、もつと自然に、もつと興味深く古典へ導き入れる方法をくふうしなければならぬだろう。

5

ころろみに、古典童話としてひろく知られている「鬼にこぶとらるること」(宇治拾遺物語)を資料とする単元について見てみよう。これは、中学校では、東書、開隆の二社が、いずれも古典初出の単元として二年で提出している。(東書本は、これよりさらに、雨月物語の「夢応の鯉魚」を「鯉になった和尚さん」(脚色、三島由紀夫)として、単元「劇」で提出しているが、これは厳密には古

五四

典単元ではない。開隆本でも、同様に、単元「研究発表」の中に、柳田国男の「山の背比べ」を採用しているが、ここでも、古典学習を直接には目標としていない。)

(一) 単元および単元目標

東書 △昔話と伝説V(二年下)

- 1 口から口へ伝えられる文学の意義を理解する。
- 2 昔話や伝説の中にひそむ祖先の心や生活に触れる。
- 3 古い物語に関心を持つ。
- 4 昔話と伝説の違いについて読みとる。
- 5 聞き書などを作ることに関心を持つ。

開隆 △古典に親しむV(二年下)

- 1 注釈を利用してやさしい古典の物語を読む。
- 2 古典をとおして当時の人々の生活を理解する。
- 3 古典の価値を認め、これを尊重する態度を養う。
- 4 日本の古典のだいたいについて理解する。
- 5 古典の原文に親しむ。(古語を辞書によつて調べる。文語と口語の違いを知る。)

(二) 単元の構成

東書

- 一、灰まき童子(岩倉市郎「おきのえらぶ昔話」) … (現代語)
 - 二、鬼にこぶとらること … (原文・口語訳対照)
 - 三、昔話の話(関敬語) … (解説文)
 - 四、伝説の話(柳田国男「日本の伝説」) … (解説文)
- 開隆

一、日本の古典文学（竹取物語・万葉集「浦島説話」…口語訳と一部原文）…（解説文）

二、鬼にこぶとらること…（原文・注）

三、かみなり（狂言）…（原文・注）

単元設定にあつては、単元目標が明確でなければならないが、それと同時に、単元を構成する資料が、その単元目標にそつたものでなければならない。右の二社の場合は、単元の異同とともに、その目標にもいくらかのずれがあるが、ともに古典をとおして祖先の心や生活を理解することを主目標とする点には変わりはない。これは、「祖先の生活を表わした作品には、ものの見方や感じ方が書かれており、現代の文化にも関係があるから…古典に親しみ、その内容をくみとり、祖先の思考や心情をうかがい知る…」という「中学校国語指導書」(136・37)の解説そのままであり、いわば古典教育の大命題でもある。文化遺産としての古典の意義の認識と、民族精神の原流の継承をめざしている。「鬼にこぶとらること」をはじめ、他の諸資料は、こうした目標を直接にうけもつものとして位置づけられていることになる。単元の異同を超えて、二社ともに「鬼にこぶとらること」をこの時期に採用したことは、入門期という時期を考慮し、学習者の興味・関心がここにあると見たからにはかならない。二社ともに導入文はつけられていないが、資料決定にあつての編集者の意図は、それぞれのことばによつてうかがうことができる。

こうした昔話や伝説に接することにより、われわれは、祖先がいだいていた人生観や処生観、あるいは道徳意識などが、どのよ

うなものであつたかを察することができる…日本の昔話や伝説は、その種類が豊かであり変化も多い。古典教育の上からも、民族精神を理解し、心を豊かにする上からも、この期の学習資料として適切であろう。（東書「新しい国語」指導書）

この物語（竹取物語をさす）は、おとぎ話めいたところもありますが、いろいろの材料を使つて、空想の世界にわたしたちを引き入れます。また、現実の生活のことも書いてありますし、人情のこまやかなところもよく書いてあります。…しやれが多くはいつていて、楽天的な古代日本人のおもかげがしのべれます。（開隆「日本の古典文学」—同単元所収解説文）

「鬼にこぶとらること」をはじめ、竹取物語や、「浦島説話」の学習者の既知の記憶を契機とすることによつて、これを古典への導入へ、興味と関心へ、古典精神の理解へと発展させようとしている。ここには、古典の壁をとりのぞくための非常な苦心を読みとることができる。しかし、編集者の苦心にもかかわらず学習者に、この古典本文が伝える民族精神やヒューマニティをくみとらせることは容易ではない。すでに述べたように、すでに童話期から物語期へ、そして小説期へと、成人感覚に近づきつつあるこの時期に、たとえ古典への導入という限定を考えた上でも、これらの童話古典だけによつて、古典への興味・関心、古典精神の理解をめざすことは賢明ではない。伝説、民話をはじめこれらの童話古典の持つ古典的価値は、決して軽視すべきではなく、この中には、こんにちに継承しなければならぬ多くの遺産を秘めてはいる。しかし、学習者の過去の（幼児期の）経験や、読みやすさへのもたればかりだけ

古典が、われわれの民族的な文化遺産であることはいうまでもないが、入門期の学習者に、これを与える場合、基本的な視点として次の二点が考えられる。

2 自然なかたちで学習に入ること。

ところで、入門期の古典学習のてつづきとしては、一般に、古典に対する知識や理解への心がまえを「導入文」や「解説文」によつて与え、これによつて、古典への親近感やあこがれを持たせ、上述のような資料によつて、この役を果たさせようとする。ここでは、古典と現代とのつながり、古典や古典入の生活や思考の理解がめざされる。導入文や解説文は、いずれも、たとえば

私たちは、だれでも幼いころ、父母や祖父母から「桃太郎」や「一寸法師」や「浦島太郎」など、数々の昔話を聞いて、目を輝かし、美しい夢の世界に遊んだ楽しい思い出を持っています。……いけば、私たち日本人の心のふるさとでも言えるものです。……現在の私たちの物の見方、感じ方、考え方が、長い間古典を通して養い育てられてきた国民的な生活感情によるものであるということがわかります。（三省 二年上「古文に親しむ」）

などの発想によつてゐる。これらは、あまりに古典を美化し、偶像化してはいしないか。この導入文や解説文を受けて与えられる「かぐや姫」や「一寸法師」や「鬼にこぶとらるること」などから、学習者は、はたして「現在の私たちの物の見方、感じ方、考え方」をより豊かにすることができると感じとることができるかどうか。

「浦島説話」や、「かぐや姫」「一寸法師」「鬼にこぶとらるる」となどを、「現代の立場で考えた」場合、どのような結論が導き出されるか。

さきの日書の「指導書」には、その道徳意識についても触れているが、童話古典にたんに示される啓蒙的類型的なそれに対しては、学習者は決して共感を示さない。「ものうらやみはすまじきことなり」といった寓話的言辭にも背をむけてしまふ。これは、ばくぜんとはしていても、文学に一つの問題解決を求める若い世代の欲求に、これらの諸作品がこたえ得る作品ではないことをものがたつていよう。興味ある作品から始めるとは言つても、これらの作品による古典教育は、この時点からもうずれさつてしまふ。

がへらい、伝説、民話など説話系列の古典の古典としての意義や
定位は、いわば知的な領域に属する。ここに「祖先の思考や心情を
うかがい知る」とは言つても、宇治拾遺物語、古今著集聞、今昔物

語をはじめその他の民話や説話の持つ文学性や古典的価値は、これはたんに親しみやすさというだけの視点でとらえられるものではなく、もつと違った面からの評価を経なければならぬ。文学史的な分野や、歴史社会学的な背景の理解は、ある程度の古典への判断力と、これに対する批判力を必要とする。古典認識の知識のうすい入門期の学習者に、安易にこれらを遺産としての古典の名で定着させてはならないだろう。与えるなら入門期ではない時期に、童話古典としてではなく、また、古典への導入のための手段としてではなく、その価値の正当な認定によつてされるのであればならない。

ユーモアや江戸笑話についても同じことが言えよう。古典としての価値の認識には、高度の享受力を必要とする。たんなるしやれや笑いばなし程度に理解されるだけでは継承の意義は少ない。

この時期の学習者の文学への関心は、人事的現実的なもの、活動的なもの、探求的なものに向けられている。歴史、伝説、冒険ものへの興味も強く、女子は成人感覚に近く、真実なるもの美なるものを要求する。単元の設定、構成にあつてはこうした面からの検討が必要である。入門期、特に古典への認識の未分化の時期には、こうして自然なかたちで、学習者の読書欲求に即した単元、資料によつて古典へ導入することが望ましい。この意味から言つて、古典入門型の単元は適當ではない。「古典入門」「古典に親しむ」「古典の世界」などとして、古典の価値や意義などについての導入文や解説文をともしながら（つまり、古典としてじゅうぶんに古典を意識させて）、行なわれる古典学習では、自然なかたちで古典が学習されることにはならない。「長い期間ずっと伝えつづけられてきたも

のが古典です。」「時代時代の相違によつてもその存在が動かないものが古典です。」「祖先の人々の考えや感じや叫びが生き生きと述べられているものが古典です。」「心のふるさととも言えるような美しきなつかしさを感じさせ、心の糧となるものが古典です。」「などという定義や解説は導入期には不要である。こうしたことは、自然な学習の中から、自然なかたちで帰納されるべきであらう。

どんなにゆきとどいた定義や解説を受けようとも、古典と学習者との間には、ある断層がある。古典をことさらに古典としてとりあげることによつてこの断層は深まる。入門期の古典学習でたいせつなことは、古典への目を開くことである。知的体系的に、また一つの権威として規範的に古典を認識させることではない。どうすれば意識させないで自然なかたちで、興味深く古典を学習させることができるか。このことが古典単元の設定にあつての課題となる。

7

国語の学習指導では、教科書による制約を受けることが大きい。使用教科書の教材本文の学習が国語の学習活動の大半をしめている。有能な教師は、自校の使用教科書以外の資料を活用することによつて、学習者の興味や欲求にこたえ、学習を効果的にすることが多いが、この場合、現在自校で使用する教科書以外の他の検定本に所載の教材が参考になる。また、同一教材でも、単元の異同によつて、その学習活動が異なる場合もある。他の教科書の単元設定の視点の検討によつて、広い視野に立つた学習指導の展開が望まれる。参考までに現行の中学校国語教科書（文部省の「教科書目録」に掲

載されている検定本の中のもの十五種)の古典単元を示すと次のようになる。単元設定の視点、単元構成、単元配列、本文資料などの諸点からいくつかの問題点が導きだされよう。

- ・ 上から配當年、単元、題材、分類、本文資料。
- ・ 分類基準 I A 現代語訳(創化) B 原文と現代語訳 C 現文 D 鑑賞
- ・ 文・解説文中に原文挿入 E 解説文

日 書

3下	3上	2下	2上
古典と現代	日本の風物 三つの舞台	日本の古典	かなとかな文学
鼻の長き僧の事 つれづれ草 庶民文学のあけぼの 大森の中はしらねが因果	勸進帳 説話文学 謡曲 日本の演劇について 羽衣	忠度と俊成 きつね塚 白石とシローナ 奥の細道をたずねて 奥の細道	かな文学 忠度と俊成 きつね塚 西洋紀聞 狂言記 平家物語 源氏日記・源氏物語・枕草子
A E C C E C C E D D C A E			
宇治拾遺物語 徒然草 本朝秘陰比事	勸進帳 謡曲 謡曲 謡曲 謡曲 謡曲	狂言記 西洋紀聞 奥の細道 奥の細道 奥の細道 奥の細道	平家物語 狂言記 西洋紀聞 奥の細道 奥の細道 奥の細道

東 書

2下	1下
小説 古典	劇 昔話と伝説
蘭学事始 古典文学の世界 ねずみのこと 外術をもつて瓜を盗み食はるるものがたり	鯉になつた和尚さん 鬼にこぶとらるること 昔話の話 伝説の話 灰まき童子 高名の木登り ちこのかいもちひするにそら獲したること 堪忍 うりぬすびと 蘭学事始 忠度の都落ち かぐや姫
C C E A	C C C C C C A E E A A
蘭学事始 伊曾保物語 今昔物語	雨月物語 宇治拾遺物語 (日本民話集) おきのえらぶ 昔話 徒然草 宇治拾遺物語 雲萍雜誌 狂言記 蘭学事始 平家物語 竹取物語

中 教

2下
小説 古典
蘭学事始 古典文学の世界 ねずみのこと 外術をもつて瓜を盗み食はるるものがたり
C C E A
蘭学事始 伊曾保物語 今昔物語

二 葉

2上 1下	3下	3上	2下	2上
昔話 昔話	古典入門	古典入門	笑いの文学	昔の物語
強力僧正 鬼の笛 弓の名入	芭蕉と奥の細道 名を聞くより 中世の文学	すずめの子 春はあけぼの 紫式部と清少納言	星とり 赤坂のきつね 鬼清水	倭建命 母の手紙 扇の的 小判十両
B A B	D C E C A E C C A D A A			
古今著聞集 十訓抄 今昔物語	奥の細道 徒然草	枕草子 源氏物語	醒睡笑 東海道中膝栗毛 狂言記	古事記 今昔物語 平家物語 西鶴諸国咄

秀 英

3下	3上	2下	3上
古典に親しむ	紀行と随筆 古文を読む	昔の話	古典のかおり
若紫 わが国の文学 はくろは昔のおもかげ	絵師の苦心 こがねをこのひ 書写し物書くこと 春はあけぼの 説話三題	やまたのおろち 説話三題	竹取物語 枕草子と徒然草 平家物語 古典の読み方
A A E C D A C C B B B A			E C C C
武家義理物語 源氏物語 狂言記 狂言記 蘭学事始 雲萍雜志 花月草子 玉勝間 枕草子 古事記 宇治拾遺物語・古今著聞集・徒然草			竹取物語 枕草子・徒然草 平家物語

教
出

古文に親しむ	心ふるさと	たかの虫	養老の滝	終らしき書を伴たらむには	おりふしの移り変わり	紫式部と薄少納言	かき山伏
古典の心							
読書について							
3下							
2上							
狂言記	徒然草	玉勝間	古今著聞集	花月草紙			
C	E	B	B	B	B	E	

2下	2上	1下	1上
読書	昔話・伝説・民謡	民話と昔物語	ことばの世界
うひ山ふみ	日本の昔話	戒語抄	
日本の民謡	伝説の意義	民話と昔物語	
	信濃守 藤原陳忠 御坂より落ち入る話		
	昔話・伝説・民謡について		
B	D	E	C
うひ山ふみ	(女の本)	今昔物語	戒語抄
(くらしの今と昔)	(日本の昔話・肥後民話集)		

光
村

3下 3上									
思索と隨想									
古典									
つれづれ草		日本の古典文学		平家物語		忠度都落		宇治川	
夢応の鯉魚		雨月物語		清水		狂言			
D	E	A	E	C	C	E	E	B	
雨月物語		狂言記		平家物語		平家物語		徒然草	

大修

1上	大修	3	2	1
言い伝えの文学		古典に学ぶ	古典にふれて	文章のわりりか
でんでん太鼓		夏草 日本の美の伝統	清水 神無月のころ	こんべいとう 扇の的
D		D D C B B C	続鳩翁道話 平家物語 徒然草 狂言記 枕草子・源氏物語 (俳句の鑑賞)	
(わらべ頃歳時記)				

書院					
2	1	3下	3上	2下	2上
日本の古典	わたしたちのふるさと	中国の古典 よい生き方	古典の世界	四季のおもむき 小説の世界 すぐれた人々	ユーモアを味わう
那須与一	扇の的 大年の客人	古人のことばを学びよう 古典の読み方	源氏物語と枕草子 兼好のユーモア 徒然草抄 那須与一	夏は夜 更級日記 創始者の苦心	保昌と袴垂 文盲の大 末広がり
C	A	C	E	C	C
平家物語	平家物語 （日本の童話） 古事記	うひ山ぶみ	（徒然草鑑賞） 徒然草 平家物語	蘭学事始 更級日記 枕草子	今昔物語 醒睡笑・聞上手 狂言記
					A
					A

3上	2上	1下	1上
古典から	小説	劇	民話 読書と辞典
うつくしきもの	木のぼり	扇の的	白うさぎ
		物語の中の少女	蘭学事始
		小説の読み方	狐塚
			更級日記
			平家物語
			徒然草
			枕草子
B	B	A	A

筑摩

3						
日本文芸の歩み						
奥山の猫また 枕草子抄 古典とは何か 源氏物語 紫式部と <small>源氏物語</small> きつねづか 日本の文芸						
E	C	E	D	E	A	B
徒然草 (古典文学教室) 狂言記						